


在外研究員研究報告書

2021年3月3日 受付

所 属	グローバル地域文化学部		氏 名	清水 穰	 印
職 名	教授				
研究課題名	現代芸術論				
研究期間	2020年9月2日 ~ 2021年2月28日				
滞在期間 ・滞在地 研究調査先	滞在期間	滞 在 地	研究・調査先		
	2020/9/2 - 2020/12/27	チューリッヒ	チューリッヒ大学芸術史研究所		
	2020/12/28 - 2021/2/28	京都	コロナ禍のため国内研究に振替		
研究費	190.4万円		研究成果の概要	別記 4,000字程度	
発 表	題 目 名	発 表 誌 名		発 行 年 月 日	
	「非感性的類似」と写真 「腐れ縁 — 写真とアーカイヴ」 「安保68年、皇紀2680年」	Web Magazine 『FOUR-D』 Web Magazine 『FOUR-D』 Web Magazine 『FOUR-D』 https://note.com/four_d_magazine		2020年9月、 2020年11月 2021年1月	
	「展覧会批評(バーゼルのティン ダリー美術館、 ヴィンタートゥーア写真美術館、 チューリッヒのギャラリー2件)」	『BT美術手帖』12月号、美術出版社 『BT美術手帖』2月号、美術出版社 『BT美術手帖』4月号、美術出版社		2020年11月 2021年1月 2021年3月 (予定)	
	著 書 名	発 行 所 名		発 行 年 月 日	
	演 題	講 演 学 会 名		講 演 年 月 日	
	Fluch des Realismus. Die Japanische Nachkriegs- fotografie und ihre Neigung zum “Realen” am Beispiel von Nakahira Takuma	チューリッヒ大学芸術史研究所主催の 講演会 (Zoom)		2020年11月13日	

2020年度在外研究報告書

グローバル地域文化学部

教授 清水 穰

私は2020年9月2日から2021年2月28日までの半年間を（学部長経験者枠の）在外研究期間として過ごす予定であった。実際には、予想を超えて長期に渡ったヨーロッパのコロナ禍のせいで、当初の研究計画にかなりの変更を強いられ、2020年12月27日まで約4ヶ月をチューリッヒ大学芸術史研究所の客員研究員として過ごし、残りの期間を国内研究に振り替えざるを得なかった。しかし、基本的な研究目的は果たせたと行ってよいだろう。

その目的とは、大きく分けて2つあった。

1つは、東京大学出版会から出版予定の日本戦後写真史についての本のために、1950年代以降現在に至る日本の写真が、主として2000年以降、欧米のアート・ワールドおよび研究者たちによって、どのような水準でどのように研究されてきているかを精査し、自著のベースとすることであった。とくにヨーロッパの研究水準とその現場を、英語、フランス語、ドイツ語文献を中心に詳しく調査し、またヨーロッパ各地での日本写真展の履歴やコレクションを精査するのである。

もう1つは、主に私の批評家としての仕事に関わり、2020年現在の写真表現が、第一世代のポストモダン写真（1960年代後半から1970年代前半の写真）とどのように関わるか、あるいはそれをとくに過去のものとしているのかを、実作品に基づいて明らかにするというもので、チューリッヒ大学芸術史研究所をベースとし、スイスという、ヨーロッパの中心に位置する土地の利を活かして、現在の美術と写真についてヨーロッパ各地でリサーチをする、というものであった。

残念ながら、この第2の目的は、コロナ禍のせいで果たせなかった。というのも、ヨーロッパ各国は互いにコロナ危険地域に指定しあって、旅客の移動を大きく制限したからである。スイスもまた、出入国に大きな制限を課していた（危険地域から帰国した者はPCR検査を実施後10日間の完全自宅隔離）。しかも日本でのそれと異なり、スイスの自己検疫はかなり厳格で、外出は全面的に禁止され、区役所職員や警官のランダムな訪問によるチェックが入り、その訪問の折に不在であれば高額な罰金が課されるのであった。私は、パリ、ロッテルダム、ドレスデン、マドリード、ケルン、ベルリン等々の代表的な写真美術館とその附属図書館を回ろうと思っていたのだが、出入国ごとに10日間の自己検疫では在外期間が終わってしまう。結局、スイスから出ないことに決めたのであった。

スイス国内に留まらざるを得なかったとはいえ、スイスは現代美術・写真（そして建築）の高度に発達した国であり、チューリッヒのほか、バーゼル、ヴィンタートゥーア、ルツェルン、ベルン、クール、ローザンヌ、ジュネーヴと回るだけでも、かなりの（公私の）コレクションを堪能することができる。さらに美術館やギャラリーはコロナ禍の下でも開かれていたので、この部分では、それほど残念に思わなくて済んだ。小さくとも豊かな各地のプライベート・コレクション

ョンを知り、そして質の高い展覧会や個展に慰められた。

*

スイスのコロナ状況は、フランス、イギリス、スペインといった国々に比べれば比較的良好で、ロックダウンもなく、10月の第3週目くらいまでは、大学も部分的に対面授業を復活させていたし、コンサートやオペラなども定員を間引く形で開催されていたのだが、11月に入るとにわかには状況はヨーロッパ中で悪化し、音楽関係の催しはすべて中止または延期となり、大学の授業もネットに戻された。

しかし、このことは第1の目的にあまり影響しなかった。スイスの図書館情報（画像・映像を含む）はすべて統一化され、デジタル化も進んでいるので、チューリッヒにいながらにして、スイス国内の資料はほぼ全て手に入る。研究所や図書館は、マスク着用の義務だけで閉鎖はされなかったもので、同僚とのやりとりにも事欠かなかった（しかし12月に入るとそれも避けられるようになった）。チューリッヒ中央図書館の蔵書は満足すべきものであったし、また、隣町のヴィンタートゥーアには有名な写真図書館が揃っていた。私は9月の最初の週間に、自分に必要なすべての文献と著作を検索してリストアップし、ダウンロードできるものはダウンロードし、紙媒体しかなければコピー依頼を出して、必要文献の収集を済ませていた。そして、合計200点ほどののぼった論文や著作を、自宅と図書館・研究所を往復するだけの単調な生活の中で他にすることもないままに（！）、粛々と読み進めたのである。この意味では、コロナ禍は、研究にはプラスに働いたと言えるだろう。

その一つの間接報告として、チューリッヒ大学芸術史研究所のゴッケル教授に頼まれて、11月13日に、中平卓馬と戦後日本写真のリアリズムについて講演を行った。Zoomを用いたドイツ語での講義というわけで妙にコンピュータの前で緊張したが、40人ほどの聴衆（一般、学生）が集まってきて、質問がたくさん出る喜ばしい反応を得た。講演の原稿は、2021年の3月までに論文の形に書き換え、チューリッヒ大学芸術史研究所が編纂する研究叢書の1冊に収められて出版される予定である。

*

当初の予定では1月からドイツ（ベルリン）へ移り、ベルリンに居を定めて、ヴォルフガング・ティルマンズの財団「Between Bridges」の資料を調査し、国立図書館に通い、週末にドレスデン（インターシティで2時間ほど）のゲルハルト・リヒター・アルヒーフを訪れるなどして、スイスとはまた異なる環境に身をおいて残りの2ヶ月を過ごそうと思っていた。が、ベルリンのコロナ状況は、11月いっぱいロックダウンを行っていたにもかかわらず、一向に好転しなかった。ベルリンの部屋探しをしながら、研究に必要なアーカイブや図書館や財団が、次々と閉鎖ないし開館制限・利用制限をかけていくのを見るに連れ、無理にドイツに渡っても、部屋に居ることしか出来ないのではないかと、という懸念が強まった。ベルリンの友人やドレスデンのアルヒーフからも「本当に来るのか」「渡航を延期したほうがよいのではないか」というメールをもらうに至って、かなり残念ではあったが、年末で在外研究を打ち切り、残りの期間を国内研究に振りかえる決心をした。チューリッヒで集めた論文や本を、ベルリンの部屋に籠もって読むだけ

ならば、日本にいるのと同じであり、それなら日本（京都）のほうが生活の自由度が高いからである。そういうわけで GR 学部事務室と研究支援課に在外期間変更申請を出し、12 月 29 日にチューリッヒを発って、アムステルダム経由で 30 日に帰国することに決まった。日本政府の規定により帰国者は公共交通が使えないので、関空に着陸する KLM（オランダ航空）便を予約したわけである（関空までなら迎えの車を都合出来た）。

12 月も後半に入ると、イギリス発の変異型コロナウイルスが蔓延しはじめ、ヨーロッパ中で危機感が高まった。幸いスイスは最後までロックダウンにはならなかった。が、帰国間近の 12 月 24 日、突然 KLM から通知があり、オランダ政府が「12 月 29 日の 0 時以降、オランダに入国・通過する全ての旅客に対して PCR 検査結果の陰性証明の提出を求める」決定をしたと知らされた。クリスマス～年末休暇期間中とて、チューリッヒの PCR 検査機関はほぼ閉まっていた。1 つだけ大学病院の窓口が 28 日の月曜日に開いていたが、証明書を出せるのは 2 日後とのことと間に合わない。つまり最初の旅程ではオランダに入国できず、日本に帰れないのであった。急遽、予約変更し、同じ旅程で一便早い 27 日の便で、28 日に帰国した。

*

帰国日翌日から 2021 年 1 月 11 日まで 2 週間の自己検疫を済ませ、国内研究に振り替えた 2 月 28 日までの期間は、上で言及した研究文献の残りを消化するとともに、上記の講演原稿を締切（3 月末）までに出版原稿に書き換え、帰国を見込んですでにスイスから注文し研究室宛で配送しておいた、日本語の本、論文、資料を整理し、読み進めることに使われた。正直、国内での 2 ヶ月は飛ぶように過ぎてしまった。

最後までコロナに振り回された在外研究であったが、観光客がほぼ全くいない地元民だけのヨーロッパ（スイス）というのも、かなり久しぶりに見る光景であった。コロナ禍に由来する不自由のおかげで、研究生活に集中できた滞在でもあった。半年間の自由な研究時間という贅沢を、同志社大学とグローバル地域文化学部に感謝したい。